新古今集・新勅撰集における七夕の歌

岩崎　禮太郎

一

新勅撰和歌集（以下、「新勅撰集」という略称を用いる）における七夕（たなばた）の歌（十三首）を読むと、その配列の妙に注目させられるのである。すなわち、星合いそのものの情景・情感を詠んだ歌五首を中央部に置き、その前には星合いを待つ歌四首、その後には七夕後朝（きぬぎぬ）の歌四首が置かれており、首尾の部分の均衡がとれているという、整然としてかつ効果的な構成になっているのに注目されるのである。その構成についての細かい考察は後述することとし、次に新古今和歌集における七夕の歌（十五首）の構成を見ると、星合いを待つ歌一首と七夕後朝の歌二首との間に、星合いについての多様な情景・情感を詠んだ十二首の歌のさまざまな変化の相を展開させていることに気づくのである。

さて、この二つの勅撰集における七夕の歌の構成と特質を考察するに当たって、まず古今和歌集から千載和歌集に至るまでの勅撰集における七夕の歌[1]の特色を概観することから始めたい。

二

古今集における七夕の歌（十一首）を見ると、星合いを待つ歌三首、後朝の歌二首との間に、星合の歌六首が置かれている。これら十一首の中で、織女星になり代って詠んだ歌が三首、彦星になり代って詠んだ歌が二首あり、それらの中で、

題しらず

こひこひてあふ夜はこよひ天の川きりたちわたりあけずもあらなむ（176〈国歌大観における歌番号。以下同じ。〉、よみ人しらず）

は声調も美しく、天の川に夜の明けないでほしいという願望が素直に表現された佳作というべきであろう。また、七夕に関連させて詠んだ、七日の日における、地上の人間の恋の歌（以下〈地上の人の恋の歌〉と略称する）が一首（181）ある。

題しらず

こよひ来む人には逢はじたなばたの久しきほどにまちもこそすれ（181、素性）

なお、知的趣向の強い歌として次の歌があるのに注目される。

あまの川もみぢを橋にわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ
（175、よみ人しらず）

後撰集における七夕の歌（二十五首）を見ると、星合いを待つ歌が239 240 244と中央部に割り込み、後朝の歌が第二首目（226）と最後の三首とに位置している。また、＜地上の人の恋の歌＞が十一首の多数にのぼり、その中に二組の贈答歌を含んでいることは、後撰集の、「褻の歌を重んじ、褻の歌中心に編纂した特異な勅撰集である」[2]という特色の現れである。なお彦星になり代って詠んだ歌が五首、織女星になり代って詠んだ歌が四首あり、その中で、

たなばたをよめ
あまの川いはこす波のたちるつつ秋のなぬかのけふをしぞまつ
（240、よみ人しらず）

は、有心の序のイメージを生かして詠んでおり、七月七日を待つ心を切実に訴えた佳作であると言えるであろう。

拾遺集における七夕の歌は、秋の部に十三首（142～154）ある外に、雑秋の部に十三首（1082～1094）収められている。星合いを待つ歌は、秋の部、七夕の歌の初めの部分に三首置かれている。七夕後朝の歌は四首（1084＜後撰集との重複歌＞1085 1090 1094）あり、雑秋の七夕の歌の中央部と最後とに分けて置かれていて、この点構成が雑然としている。＜地上の人の恋や物思いの歌＞は三首あり、彦星になり代って詠んだ歌は一首、織女星になり代って詠んだ歌は三首である。なお、古今・後撰の両集には見られなかったところの屏風歌が秋の部に五首、雑秋の部に四首、扇に書いた歌が雑秋の部に三首見えている。

後拾遺集における七夕の歌（十首）を見ると、星合いを待つ歌二首が最初と第三首目とにあるが、七夕後朝の歌はない。また、＜地上の人の恋歌＞は一首あるが、織女星や彦星になり代って詠んだ歌は全く見えない。

金葉集における七夕の歌を『八代集全註・八代集抄下巻』（山岸徳平氏編）によって、初奏本（十五首）、二度本（十首）、三奏本（十二首）と見ていくと、歌数には異同があるが、それぞれの本の間の異同は全面的な入れ替えではなくて、たとえば二度本十首の中の八首は他のどの本にもあるという有様であって、部分的な入れ替えになっている。初奏本にあった、

七夕に、前栽ある所にて、殿上の人々多くあつまりて、歌読けるに露といふもじを取りてよめる　大中臣能宣
いとどしく思ひけぬべしたなばたの別れの庭に置ける白つゆ

は二度本以下において省略されているが、この歌は後に新古今集、秋上、326に採られている。さて、どの本においても星合いを待つ歌はない。七夕後朝の歌は、どの本においても重んじられており、初奏本五首（242 243 244 247 248＜八代集全註の歌番号。以下同じ。＞）、二度本六首（172～177）、三奏本五首（154 155 157 158 161）となっている。なお、彦星になり代って詠んだ歌は、どの本にも次の一首、

七夕の心をよめる　三宮
あまの川別れにむねのこがるればかへさの舟はかちもとられず

があり、＜地上の人の恋の歌＞は三奏本に次の一首、

題不知　小大君
七夕に貸しつと思ひしあふことをその夜なき名の立ちにけるかな

が見えている。

詞花集における七夕の歌（十首）を見ると、星合いを待つ歌はなくて、七夕後朝の歌三首が終りの部分に置かれている。〈地上の人の恋の歌〉は全くなく、彦星になり代って詠んだ歌は二首ある。知的趣向の強い歌として、

たなばたの待ちつるほどの苦しさとあかぬ別れといづれまされる（リィ）
（90、藤原顕綱）

がある。なお、美しい幻想的な歌として、

あまの川よこぎる雲や七夕のそらだきもののけぶりなるらむ
（86、顕輔）

があるのに注目される。

次に、千載集における七夕の歌はわずか七首であって、八代集の中でその歌数が最も少ない。彦星・織女星になり代って詠んだ歌はなく、また〈地上の人間の恋の歌〉も全くない。具体的に見ると、まず織女星の星合いを待ち続けてきた心を推し量った。

234たなばたの心のうちやいかならむまちこしけふの夕暮の空
（兼実）

の歌から始まり、最後に240の七夕後朝の心を詠んだ歌を置いている。このように、最初に星合を待つ歌を置き、最後に七夕後朝の歌を置くという構成は、先行勅撰和歌集においては古今集のみであった。さて、次には、

235七夕のあまつひれふく秋風にやそのふなづに（をィ）みふね出づらし
（隆季）

236七夕のあまのはごろもかさねてもあかぬちぎりやなほむすぶらむ（二条太皇太后宮肥後）

237こひこひてこよひばかりやたなばたの枕にちりのつもらざるらむ（前斎宮河内）

と続き、以上の四首はいずれも推量の助動詞を用いており、地上の人間からはるか天上の星合いを、それぞれの視点から思いやって詠んだ歌になっている。ところで、その次の歌は、

238七夕のあまのかはらのいはまくらかはしもはてずあけぬ此夜は
（源俊頼）

である。第五句の「あけぬこの夜は」ということばは、古今集巻二十の大歌所御歌である、

近江よりあさ立ち来ればうねの野に鶴（たづ）ぞ鳴くなる明けぬこの夜は
（1071）

を念頭に置いて用いたものかと思われる。238の歌における「あまのかはらの岩枕」については、北村季吟が八代集抄において「河辺の逢瀬なれば岩枕とよめり」と言っているとおりであって、「あまのかはらの岩枕かはしもはてずあけぬこの夜は」という、二星の逢瀬の具象的表現は、強い実感のこもった表現になっていて、星合いの夜の短さ、名残惜しさを余情として感じさせている。そうして、この歌は、千載集における七夕の歌七首のクライマックスをなしていると言えるであろう。次の、

239たなばたに花ぞめ衣ぬぎかせばあかつき露のかへすなりけり
（崇徳院）

は、「かせば」に対して「かへす」と応じた縁語の技巧も注目されるが、また、

世の中の人の心は花染めのうつろひやすき色にぞありける（古今・

恋五・よみ人しらず）

を連想させて、はかない感じを出している。次の、七夕後朝の心を詠んだ、

240あまの川心をくみておもふにも袖こそぬるれあかつさのそら

（師房）

は特色がある。すなわち、先行の勅撰集の、

今はとて別るる時は天の川わたらぬさきに袖ぞひちぬる（古今・182・源宗于）

かぎりありてわかるる時も七夕のなみだのいろはかはらざりけり

（金葉・174・内大臣）

七夕のあかぬ別れのなみだにや花のかつらもつゆけかるらむ

（金葉・175・師時）

かへるさはあさ瀬もしらじあまの川あかぬなみだに水しまさらば

（金葉・177・源俊頼）

のような彦星・織女星の流す涙を詠んだ歌とは違って、まれに逢う夜の暁の名残を推し量る地上の人間の袖がぬれると詠んでいるのである。この歌は、千載集好みの感傷的な抒情歌になっている。そうして、この歌を最後に置いて七首で七夕の歌を構成しているのである。このわずか七首による七夕の構成は、立体的に巧みにでき上っていると言うことができるであろう。

三

次に、新古今集における七夕の歌（十五首）を考察しよう。

風巻景次郎氏は、新古今集中の歌[3]を古代歌群（古今・後撰・拾遺・後拾遺集時代の歌人の歌群）と近代歌群（金葉集以後の時代の歌人の歌群）とに分けておられる。[4]

新古今集における七夕の歌について、その作者名と、古代歌人・近代歌人の別を表示すれば、次のとおりである。（「古」は古代歌人、「近」は近代歌人を示す。）

三一三　「古」　紀貫之（古今初出）
三一四　「古」　山辺赤人（万葉歌人）
三一五　「古」　権大納言長家（後拾遺初出）
三一六　「古」　藤原長能（拾遺初出）
三一七　「古」　祭主輔親（拾遺初出）
三一七　「古」　太宰大貳高遠（拾遺初出）
三一九　「古」　小辨（後拾遺初出）
三二〇　「近」　皇太后宮大夫俊成（詞花初出）
三二一　「近」　式子内親王（千載初出）
三二二　「近」　入道前関白太政大臣（稿者注、兼実）（千載初出）
三二三　「近」　権中納言公経（新古今初出）
三二四　「近」　待賢門院堀川（金葉初出）
三二五　「古」　女御徽子女王（拾遺初出）
三二六　「古」　大中臣能宣朝臣（拾遺初出）
三二七　「古」　紀貫之（古今初出）

右を見てまず気づくことは、近代歌人の歌が少ないことである。思うに、七夕の歌は、古来詠み古るされている伝統的な歌題であって、しかも比較的単純な伝説に基づく歌題である。したがって、こ

の時代において新鮮味のある新古今歌風の歌を詠むことが困難であり、近代歌人のすぐれた歌があまりなかったので、古代歌人の歌を多く採ったのであろう。近代歌人の歌群五首は、中央よりやや後寄りに置かれている。

さて、新古今集における七夕の歌（十五首）の構成を見ると、星合いを待つ歌一首と七夕後朝の歌二首との間に星合いについての多様な情景・情感を詠んだ十二首の歌のさまざまな変化の相を展開させている。

最初の星合いを待つ歌は、

延喜の御時の月次屏風に　紀貫之

313 大空をわれもながめて彦星の妻待つ夜さへひとりかも寝ん

である。この歌は屏風歌であって、七夕に関連した〈地上の人間の恋の歌〉になっている。七夕に関連した〈地上の人間の恋の歌〉は、詞花集・千載集ではなくなっていたが、新古今集では復活しており、320の歌もそれである。思うに、新古今集における七夕の歌は、十五首という比較的多数の歌が収められているので、星合いについてのさまざまな趣向の歌を配列したのであろう。それらの多様な趣向の歌の情感が、やがて最終部における326 327の後朝の歌の哀感へと結びつくという構成であると受け取ることができる。

次の、

題不知　山部赤人

314 この夕べ降りつる雨は彦星のと渡る舟のかいのしづくか

宇治前関白太政大臣家にて、七夕の心をよみ侍りける　権大納言長家

315 年をへてすむべき宿の池水は星合のかげもおもなれやせむ

花山院の御時、七夕の歌つかうまつりけるに　藤原長能

316 袖ひちてわが手にむすぶ水のおもに天つ星合の空を見るかな

の歌は、「雨」「水にうつる星合の空」というように、星合の周辺の事物にこと寄せて詠んでいる。なお、315は七夕に関連した祝の歌である。このような「寄二七夕一賀」の歌ともいうべき前例としては、金葉集の、

後冷泉院の御時、皇后宮の春秋の歌合に七夕の心を　土佐内侍

よろづ代に君ぞみるべきたなばたのゆきあひの空を雲のうへにて

（秋・168）

がある。

次に、雲間より見渡した、

七月七日、七夕祭する所にてよみ侍りける　祭主輔親

317 雲間より星あひの空を見渡せばしづごころなき天の川波

の歌があり、更に秋風を配した、

七夕の歌とてよみ侍りける　太宰大貳高遠

318 たなばたの天の羽衣うちかさね寝る夜すずしき秋風ぞ吹く

小弁

319 たなばたの衣のつまはこころして吹きなかへしそ秋の初風

が続く。318の歌については、窪田空穂氏が「天上の歓会のたのしさと、それを思いやるたのしさを思わせるに足りるものがある。明るい恋愛賛美歌といえる。」[5]と述べておられるとおりである。なお、この歌の「すずしき」という快い感覚は、321 322の歌の「涼し」に照

応している。次の319の歌は、

古今・秋上・よみ人しらず「わがせこが衣のすそを吹き返しうら
めづらしき秋の初風」

という歌を念頭に置いて詠まれたものであろう。この歌の「たなばた」の意味について、「織女星をさす」とする説（日本古典文学大系、頭注）もあるが、久保田淳氏[6]が「二星の総称としていった」と述べられ、「たなばたの衣のつまは」を「二星の衣の褄を、そしてまた、恋しい相手の人を」と解され、「この歌も織女の立場で詠まれたものと考えた方がよいであろう。」と述べておられるのに従うべきであろう。「衣の褄」を「夫（つま）」と掛詞にし、「夫を帰す」に通じさせるという技巧を伴っている。

その次の歌からは近代歌群になって、俊成の、

320たなばたのと渡る舟のかぢの葉にいく秋書きつ露のたまづさ

となる。この歌は、

後拾遺・秋上・上総乳母「天の川と渡る舟のかぢの葉に思ふことをも書きつくるかな」

を本歌としている。320の歌の解釈として『尾張の家づと』（石原正明）は、主語を織女と解し、「たなばたは幾秋文をかはしつらんとなり」と述べて織女のみのことを詠んだ歌と見ていて、『大系』や『全集』も同じである。しかし、第二句までは序詞と見て、本歌と同じく地上のこととし、主語を作者自身と考えた塩田正男氏・窪田空穂氏・久保田淳氏の見解に従いたい。七夕には、露を硯の水として、かぢの葉に歌を書いて織女星にささげる風習があったのである。ところで、近代歌群の最初にこの〈地上の人の恋の歌〉を置いたのは、変化をねらった構成上の配慮によるものであったと考えられる。

次の歌、

百首歌の中に　　式子内親王

321ながむればころもで涼しひさかたの天の河原の秋の夕ぐれ

家に百首歌よみ侍りけるに　　入道前関白太政大臣

322いかばかり身にしみぬらむたなばたのつま待つよひの天の河風

七夕の心を　　権中納言公経

323星あひのゆふべすずしきあまの川もみぢの橋をわたる秋風

を見ると、322の「天の河風」、323の「秋風」は、前の318の「秋風」と319の「秋の初風」と照応して、この七夕歌群に季節感を漂わせており、また、321と323の「すずし[7]」という感覚は、318の「すずし」と照応してこの七夕歌群において強調された快い感覚になっている。これらの歌の中で、323の歌は新古今歌風の特色を具えた歌になっている。この歌は、

古今・秋上・よみ人しらず「天の川もみぢを橋にわたせばやたなばたつめの秋をしも待つ」

を本歌としている。本歌においては理知的な骨組みが目立つのであるが、この歌においては、星合いの夕べの、河風の涼しい天の川にかかっている紅葉の橋の上を、今渡っている秋風よ、と詠んでいて、空漠たる拡がりの中に、華麗な感覚的なイメージが感じられるのである。そうして、この歌には、繊細な感じを伴って官能に訴える美があり、浪漫的幻想的陶酔的な境地に誘い込むような気分的な美しさがある。すなわち艶[8]の情調が漂っているのである。

次に、近代歌群の最後には、

待賢門院堀河

324たなばたのあふ瀬絶えせぬ天の河いかなる秋か渡り初めけむ

という、比較的単純な発想と表現の歌を置いて、次へのつなぎにしている。

終りの三首は、再び古代歌群となる。

女御徽子女王

325わくらばに天の川波よるながら明るく空にはまかせずもがな

の歌は、先行勅撰和歌集における、星合いの夜の明けないことを願う、

古今・秋上・よみ人しらず「こひこひて逢ふ夜はこよひあまの川霧立ちわたりあけずもあらなむ」

後撰・秋上・よみ人しらず「秋の夜の心もしるくたなばたのあへることよひはあけずもあらなむ」

後撰・秋上・兼輔「たなばたの帰るあしたの天の川船も通はぬ浪もたたなむ」

の歌と心において共通な点があるが、この325の歌は、第二句までを有心の序とし、「よる」を掛詞として用い、天の川波の寄るということによって二星相逢うことを暗示させるという技巧を用いている。

最後の、

大中臣能宣朝臣

326いとどしく思ひけぬべしたなばたの別れの袖における白露

紀貫之

327たなばたは今やわかるる天の川かは霧たちて千鳥鳴くなり

の二首は、七夕後朝の別れを詠んだ歌である。326は、『能宣集』の詞書によると、七月七日の夜、蔵人所で探題（幾つかの題の中から探り取った題で歌を詠む催し）により、「つゆ」の題を取って詠んだ歌であることがわかる。そうして、

後撰・秋上・よみ人しらず「天の川流れてこふるたなばたの涙なるらし秋の白露」

を踏まえていると考えられる。326の歌は、二星が悲しい後朝の別れをする情景とその心情とを思いやって詠んだ歌になっている。「白露」は別れを悲しむ涙をも暗示している。第二句の「思ひけ」は「思ひ消え」の意であって、「白露」の縁語になり、その心の消え入りそうな状態をあらわしている。久保田淳氏は、「この歌から、定家の絶唱、

白妙の袖の別れに露おちて身にしむ色の秋風ぞ吹く（新古今・恋五・一三三六）

はさほど遠くない。」と述べておられる。[9] 次に、327の歌は屏風歌である。絵は川霧の立った天の川の絵であろうか。川霧の中から聞こえる哀感を帯びた千鳥の声が、織女星の忍び泣きの声を暗示している歌である。以上のように、326 327の二つの後朝の別れを詠んだ歌は、いずれも感覚を尊重し、哀感を帯びた歌になっている。そうして、新古今集の七夕歌群におけるさまざまな趣向の歌の情感が、最後の二首における別れの大いなる哀感へと流れこんでいる感がある。

四

新勅撰集における七夕の歌（十三首）の作者を見ると、次のとお

りである。

二〇八　鎌倉右大臣〔稿者注、実朝〕（新勅撰初出）
二〇九　殷富門院大輔（千載初出）
二一〇　法印猷円（新古今初出）
二一一　崇徳院（詞花初出）
二一二　藤原敦仲（千載初出）
二一三　前中納言基長（後拾遺初出）
二一四　菅原在良朝臣（新勅撰初出）〔稿者注、白河・堀河・鳥羽朝頃の人〕
二一五　権大納言経輔（後拾遺初出）
二一六　正三位家隆（千載初出）
二一七　権中納言伊実（新勅撰初出）〔稿者注、近衛・後白河朝頃の人〕
二一八　藤原清輔朝臣（千載初出）
二一九　八条院高倉（新古今初出）
二二〇　前大納言隆房（千載初出）

そもそも、新勅撰集の撰歌範囲は新古今集と同様に上古以来ということであって、この集の他の部分においては万葉歌も三代集歌人の歌も採られているのに、この七夕歌群においては最も古い歌が後拾遺歌人の歌である。そのことは、新古今集の七夕歌群において、万葉歌人の歌も採り、三代集歌人の歌も採っているのとは大いに異なっている。

さて、勅撰和歌集の七夕歌群において、初めに星合いを待つ歌を置き、終りに七夕後朝の歌を置くという構成が、既に古今・千載・新古今の各集において用いられている。この新勅撰集においても同様である。ところで、この新勅撰集においては、「星合いを待つ歌」四首、「七夕後朝の歌」四首とその比率が多く、しかも両者の釣合いがとれているという整然たる構成には注目すべきものがある。このことについて表にまとめると別表のようになる。

	古今	千載	新古今	新勅撰
星合いを待つ歌	3	1	1	4
星合いの歌等	6	5	12	5
七夕後朝の歌	2	1	2	4

初めの、星合いを待つ歌は、

題しらず　　鎌倉右大臣

208 彦星のゆきあひをまつひさかたの天の川原に秋風ぞ吹く

殷富門院大輔

209 かささぎのよりばの橋をよそながらまちわたる夜になりにけるかな

法印猷円

210 天の川わたらぬさきの秋風にもみぢの橋の中やたえなむ

百首歌めしける時　　崇徳院

211 天の川やそせの浪もむせぶらむ年まちわたるかささぎのはし

と並んでいる。210の歌は、

古今・秋下・よみ人しらず「龍田川もみぢ乱れて流るめり渡らば錦中やたえなむ」

を本歌としている。本歌が現実の龍田川について詠んでいるのに対して、この歌は幻想の世界における空漠たる拡がりの中に華麗な感覚的イメージを描いている。以上、それぞれの特色をもつこれら四首の歌は、「秋風」「もみぢ」によって季節感を出し、「天の川原」「かささぎの橋」と、星合いの背景を想像して、星合いの序曲を奏している感がある。

右の、星合いを待つ歌の次に置かれている中央部分の歌は、

清輔朝臣家に歌合し侍けるに、七夕のこころをよみ侍ける　藤原敦仲

212天の川うきつの波に彦星のつまむかへ舟いまやこぐらし

後三条院御時、うへのをのこども斉院にて七夕歌よみ侍けるに　前中納言基長

213思へどもつらくもあるかなたなばたのなどかひと夜と契りおきけむ

法性寺入道関白家にて、七夕のこころをよみ侍ける　菅原在良朝臣

214天の川星合ひの空も見ゆばかり立ちなへだてそ夜半の秋霧

宇治入道前関白の家にて、七夕歌よみ侍けるに　権大納言経輔

215たなばたのわが心とやあふことを年にひとたび契りそめけむ

百首歌よみ侍ける秋歌　正三位家隆

216草の上の露とるけさの玉づさに軒ばのかぢはもとつ葉もなし

である。

この中央部分の歌を、新古今集や千載集と比べて異なる点は、二星の逢う場面を具象的に想像した歌がないことである。すなわち、千載集における、

七夕のあまのはごろもかさねてもあかぬちぎりやなほむすぶらむ（236）

こひこひてこよひばかりやたなばたの枕にちりのつもらざるらむ（237）

七夕のあまのかはらのいはまくらかはしもはてずあけぬこの夜は（238）

新古今集における、

七夕のあまのは衣うちかさねぬる夜涼しき秋風ぞ吹く（318）

のような歌がないことである。そうして、214の歌から連想されるところの、夜半の秋霧にへだてられたはるかに遠い星合いの場面を、あたかもヴェールに包まれたものを眺めるごとく、おぼろげに想像させるというような歌の構成になっている。

一首一首見ると、右の212の歌は、万葉集に、

あまの河浮津（うきつ）の波音（なみと）騒くなりわが待つ君し舟出（ふなで）すらしも（巻八・1529・山上憶良）

という類歌があり、新しい発想ではないが、星合いのつま迎え舟の動きというイメージを表現している。214の歌は、星合い空と秋霧というイメージを表わしながら、「たちなへだてそ」と作者の願望を強く出している。213と215との歌は、古今集に、

ちぎりけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたびあふはあふかは（秋上・178・藤原興風）

という類歌があるので、これも新しい発想ではないが、年に一夜だ

新古今集・新勅撰集における七夕の歌

けの契りということについての、作者の悲しみと疑問とを表現した、主情的な歌となっている。ところで、新古今集の七夕歌群における中央の部分においては「秋風」という現象と「涼し」という快い感覚とが強調されていたのに対し、この新勅撰集においては「年に一夜だけの契り」ということが強調されているのである。しかも、この「年に一夜だけの契り」という情感をあらわす213と215との歌は、212 214 216という、情景のイメージを中心とする歌群の中に分け入るように位置せしめられていて、212～216の歌群全体を「年に一夜だけの契り」という情感に染めている感がある。

次の216の歌は、後拾遺集の、

天の川とわたる舟のかぢの葉に思ふことをも書きつくるかな（前掲）

を本歌としている。同じ歌を本歌とした、前掲の新古今集の、

たなばたのと渡る舟のかぢの葉にいく秋かきつ露の玉づさ　（俊成）

が片思いの思い出を表現しているのに対して、この216の歌は、星合いの日の、地上における特異な一風景を客観的に表現している。そうして、この歌は、星合いの日の行事に寄せる人々の願望の大きさを表わしている。

終りの四首には、「七夕後朝のこころをよみ侍りける」という詞書がつけられており、

七夕後朝のこころをよみ侍ける　　権中納言伊実

217たなばたの天の川波立ちかへりこの暮ればかりいかで渡さむ　藤原清輔朝臣

218天の川みづかげ草におく露やあかぬ別れの涙なるらむ　八条院高倉

219むつごともまだつきなくに秋風にたなばたつめや袖ぬらすらむ　前大納言隆房

220たまさかに秋のひと夜をまちえてもあくるほどなき星合ひの空

と続いている。

右の217の歌は、この暮れにもう一度渡してほしいという、二星への思いやりの心を詠んでいる。218の歌は、

万葉・巻十・二〇一三「あまのがは水陰草（みづかげぐさ）の秋風になびくを見れば時は来にけり」

後撰・秋上・二四二よみ人しらず「天の川流れてこふるたなばたの涙なるらし秋の白露」

の二つの歌を踏まえている。ところで、右の後撰集の「天の川流れてこふる……」を踏まえている七夕後朝の歌に、新古今集・326の大中臣宣の、

いとどしく思ひけぬべしたなばたのわかれの袖におけるしら露　（前掲）

があった。この能宣の歌は、「露」が「涙」を暗示し、「露」と「け（消）」とが縁語となるという技巧が用いられており、別れの場面における二星のイメージと心情とを表現した歌であったが、それに比べて218の清輔の歌はきわめて平淡な歌になっている。なお、新古今集における七夕後朝の歌二首の中の他の一首である紀貫之の、

たなばたは今やわかるる天の川かは霧たちて千鳥鳴くなり（219）

（前掲）

は、視覚と聴覚との二つの感覚に訴えて哀感を盛りあげている歌であった。新勅撰集の七夕後朝の歌には、このような新古今集好みの歌はなくて（新勅撰集の七夕の歌のすべてにもない）、平淡な言葉を続けて、218 219の歌において二星の別れの涙を想像し、220の歌において一夜の短かさを嘆いているのである。

以上のように、この新勅撰集における七夕歌群を見ると、初めの星合いを待つ四首の歌において、天の川の星合いの場面の背景を想像しながら星合いを待つ心情を表現し、次に、中央部の五首の歌において、夜半の秋霧にへだてられたはるかに遠い星合いの場面を、あたかもヴェールに包まれたものを眺めるごとく、おぼろげに想像させながら、一夜だけの契りということを思いやって、人間の感ずる悲しみを表わしている。そうして、終りの七夕後朝の四首の歌において、二星への思いやりの心情を吐露し、別れの涙を想像し、一夜の短さを嘆いているのである。このように、新勅撰集における七夕歌群は、新古今集におけるそれの模倣に陥ることなく、構成に配慮を行き届かせ、平明・平淡な歌を連ねて、独自の世界を構成しているのである。

〔注〕

1　古今～詞花は、山岸徳平氏編『八代集全註』による。千載は、久保田淳氏・松野陽一氏校注『千載和歌集』に、新古今集は、久保田淳氏校注『新古今和歌集全評釈』に、新勅撰集は、久曽神昇氏・樋口芳麻呂氏校訂『新勅撰和歌集』〈岩波文庫〉による。

2　片桐洋一氏「後撰和歌集の物語性」国語と国文学、昭42・10月

3　新古今集の撰歌範囲は、千載集が一条帝ころ以後という限定をつけたのに反して、広く上古以来ということにひろげている。

4　風巻景次郎氏「新古今的なるものの範囲」（『新古今時代』所収）

5　窪田空穂氏『完本新古今和歌集評釈、上巻』二九一ページ

6　久保田淳氏『新古今和歌集全評釈、第二巻』二七五ページ

7　窪田空穂氏は、「秋の夕暮、天の河を見やるところからくる感覚的の涼しさと、二星相会う夜と思うと身にしみるものがあるという精神的の意味の涼しさをもっている。単純だが含蓄がある。」と述べておられる。

8　拙稿「定家における艶・妖艶と余情妖艶体」（『新古今歌風とその周辺』所収）

9　注6の書、二八六ページ